

## 世界一のお兄ちゃん

佐藤 愛美

「こちょこちょこちょこちょよ。」

三才年上のお兄ちゃんは、いつも私にちょっかいを出してくる。お兄ちゃんというより弟みたいに思うこともある。お兄ちゃんは三才年上。世間的には、れっきとしたお兄ちゃんだ。しかし、少しおつちよこちよいで、心配性なところもあって、さみしがり屋。私は妹だけど、そんなお兄ちゃんをほっとけないことも多い。

お父さんは、毎日仕事で忙しくて夜勤の日もある。お母さんも仕事で暗くなってから帰ってくることも多い。夏休みなどの長い休みに入ると、朝から二人で過ごすことも多い。

二人で計画を立てた通りに勉強して、昼食もあらかじめお母さんが準備してくれているものを温めたり、少し手を加えて二人で食べる。食器洗いや後片づけは、私がすることの方が多い。どちらかという、私は何でも先に気づいて進めたり、決めたりしている。

そんな日常の毎日の中、先日家の中に大きな虫が入ってきた。二人しかない時は、だいたい私が何でもそつ先して行動にうつすことが多いが、さすがに虫は苦手。キヤーキヤー逃げ回っていた時、いつもゆつたりとしているお兄ちゃんが、何かととんできてくれた。そして、そつと私の前に立って、新聞紙を丸めて、虫を払いのけてくれた。虫は玄関ドアから外へと飛んで出て行った。

「ああ。よかったあ。」

私は思わずため息まじりに、そう言った。

その日の夜、お父さんとお母さんにこの話をしたら、お父さんがこう言った。

「さすが、お兄ちゃんやなあ。」

お母さんは、

「お兄ちゃんのおかげで、とても助かったわあ。」

私は、日常から当たり前にお兄ちゃんを弟みたいに感じていたし、ちょっかいを出してくる相手をお姉ちゃん気分ですていたけれど、いざ二人きりの時に私が困ったり、どうしようもない出来事にそうぐうした時は、お兄ちゃんはとてもたのしくてかっこいい。

このできごとの後、私は気付いた。お兄ちゃんは、本当はとももしっかりしていて、妹思い。ふだんから、二人きりで私がさみしい思いをしないように楽しく明るい雰囲気を作ってくれているのではないかと。何でも、私が決めた通りに生活しているのも、お兄ちゃんががまんをしてくれて、私の希望をかえてくれているのだと。そして、いざという時には私を守ってくれていることに。

次の日の朝、私はお兄ちゃんに聞いてみた。

「お兄ちゃん、食べたいお菓子を選んで。」

と。すると、お兄ちゃんはこう言った。

「まなみが先に選んで。残った方でいいよ。」

と。いつも通りの二人の会話だ。

お兄ちゃんは、やっぱりお兄ちゃんだった。

私には、世界一大好きなお兄ちゃんがいる。